秋田魁新報　2021年12月17日付　県北

# 「今後も交流続けよう」

## ヨルダン大使らが料理

### 五輪・パラホストタウン　能代で感謝の「フェア」

東京五輪・パラリンピックで中東・ヨルダンのホストタウンを務めた能代市で16日、ヨルダンから市民に感謝を伝えるイベント「ヨルダンフェアin能代2021」が開かれた。駐日ヨルダン大使館のリーナ・アンナーブ大使らが感謝の気持ちを込めて作ったヨルダン料理を振る舞うなどした。

能代市は2019年8月にヨルダンのホストタウンに登録。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、事前合宿は中止となったが、応援メッセージ入りのヨルダン国旗を選手団に届けたり、パブリックビューイングで声援を送ったりした。両国の文化に理解を深めるさまざまなイベントも開催された。

ヨルダンフェアは市や民間企業などでつくるホストタウン実行委員会の主催。市文化会館で開かれ、交流に関わった能代松陽高や浅内小の児童生徒ら約150人が来場した。大使館からはアンナーブ大使やタラール・マサルワ領事らが参加した。

会場にはアンナーブ大使とヨルダンの伝統料理など6品が用意され、来場者が味わった。能代松陽高3年の植村菜那さんは「ヨルダン料理は初めてだったが、スパイスが効いていたり、食感がもちもちしていたりと、どれもおいしかった」と話した。

市内10店舗によるヨルダン料理のコンテストも行われ、来場者や審査員の投票で、イランド・ネパール料理「エベレスト」（後谷地）の「能代野菜をたくさん使ったカパブベンダルカレー」が大賞に選ばれた。「居食屋七菜」（畠町）の「白神ねぎペーストを使ったチキンマンサフ」には大使賞が贈られた。

能代の文化を伝えようと、天然杉を使った箸づくりも行われ、アンナーブ大使らが児童と一緒にかんなややすりで削って箸を完成させた。

アンナーブ大使は「今までのどの活動においても、能代の皆さんの真心や寛容さを感じることができた。大会は終わったが、これからもこの素晴らしい関係が勢いを失うことなく続くことを願っている」と話した。（斎藤将典）

ヨルダン料理を味わう高校生

小学生と一緒に記念写真に納まるアンナーブ大使（後列右から４人目）

©秋田魁新報社